

ぴかぴかする夜

小川未明

青空文庫

都会とかいから、あまり遠くとお離れていないところに、一本ぼんの高い木たかきが立たっていました。

ある夏なつの日の暮れ方がたのこと、その木きは、恐ろしさのために、ぶるぶると身みぶるいをしていました。木きは、遠くとおの空そらで、雷かみなりの鳴る音おとをきいたからです。

小さな時分じぶんから、木きは、雷かみなりの怖ろしいのをよく知しっていました。風かせをよけて、自分じぶんをかばってくれた、あのやさしいおじさんの大木たいぼくも、ある年の夏なつの晩方ばんがたのこと、目めもくらむばかりの、電いなすまといっしょに落おちた、雷かみなりのために、根ねもとのところまで裂さかれてしまったのです。そればかりでない、この広い野原のほらのそこここに、どれほど多おほくの木きが、雷かみなりのたぬに、打うたれて枯かれてしまったことでしょう。

「あまり、大おほきく、高たかくならないうちが、安心あんしんだ。」といわれていましたのを、木きは、思おもい出だしました。

しかし、いま、この木きは、いつしか、高たかく大おほきくなっていたのでした。それをどうすることもできませんでした。

木きは、それがために、雷かみなりをおそれていました。そして、いま、遠方えんほうで鳴る雷かみなりの音おとをきくと、身みぶるいせずにはいられませんでした。

このとき、どこからともなく、湿っぽい風に送られてきたように、一羽のたかが飛んできて、木のいただきに止まりました。

「私は、山の方から駆けてきた。どうか、すこし、翼を休めさしておくれ。」と、たかはいいました。

しかし、木は、身ぶるいして、よくそれに答えることができませんでした。

「そ、そんなことは、お安いご用です。た、ただ、あなたの身に、障りがなければいいがと思つています。」と、やつと、木は、それだけのことをいうことができました。

「それは、どういうわけですか。なにを、そんなに、おまえさんは、おそれているのですか？」と、たかは、木に向かつて問いました。木は、雷のくるのを恐ろしがっていると、たかに向かつて、これまで聞いたたり、見たりしたことを、子細に物語つたのでありました。これを聞いて、たかはうなずきました。

「おまえさんのおそれるのも無理のないことです。雷は、こちらにくるかもしれません。いま、私は、あちらの山のふもとを翔けてきたときに、ちようど、その近くの村の上を暴れまわっていました。しかしそんなに心配なさいませぬ。私が、雷を、こちらへ寄越さずに、ほかへいくようにいつてあげます。」と、たかはいいました。

木は、これを聞くと、安心いたしました。しかし、この鳥のいうことを、はたして、雷がききいれるだろうかと不安に思いました。そのことを木は、たかにたずねますと、
 「私は、山にいれば、雷を友だちとして遊ぶこともあるのですから、きくも、きかぬもありません。」と、たかは、うけあつて、いいました。ちようど、そのとき、前よりは、いっそう、大きくなつて、雷の音が、とどろいたのでした。木は、顔色を失つて、青ざめて、ふるえはじめたのです。たかは、空にまき起こつた、黒雲を目がけて、高く、高く舞い上がりました。そして、その姿を雲の中に、没してしまいました。たかは、黒雲の中を翔けりながら、雷に向かつて、叫びました。

「君は、あんな、さびしい、野原などをおびやかしたつて、しかたがないだろう。それよいか、もつと、おびやかしがいのある、都の方へでもいったらどうだ。」と、たかは、いったのです。怖ろしい顔をしているが、案内、心のやさしい雷は、太いしやがれた声をだして、

「いつたい僕は、だれをも、おびやかしたくないんだが、僕が、散歩に出ると、みんなが怖がつてしかたがない。なんと僕は不幸ものだろう。野原にいつても、いちばん高い木のどがった、頂へ、ちよつと足を止めるばかりなんだ。どこへいつたつて、僕は遠慮

をしている。都の方に、あまりいかないのも、僕の遠慮がちからなんだ。それで、いつもさびしい野原の方へ、いくようなしだいなんだ。」と、答えました。すると、たかは、空に、もんどりを打ちながら、

「よく、君の心の中は、わかつている。しかし、いつも、野原の方へいくんでは、君も、散歩のかがないというもんだ。このごろ、都会は美しいぜ。ひとつ、今日は、都会の方へいつてみたらいいだろう。」と、たかはいいました。

正直で、信じやすい雷は、たかのいうことに従いました。そして、雷は、方向を転じて、都の方へ進んでいきました。黒雲は雷に、従いました。そして、さながら前ぶれのように冷たい、湿っぽい風は、野面を吹くかわりに、都会の上を襲ったのです。

雷は目の下に、燈火のきらきらとついた都会をながめました。そこからは、自分の鳴る音に負けないほどの、ゴウゴウなりとどろく、汽罐のうなり音や、車輪のまわる音や、いろいろの蒸気機関の活動するひびきをききました。

この有り様を見ると、雷は、ここでは、遠慮をしなくてもいいだろう、という気が起きました。しかし、雷は、どこへでも落ちていいというような、乱暴な考えはもちませんでした。どこか、自分の、ちよつと足をとめていいところはないかと探しました。

正しょうじき直ちよくな、やさしい雷かみなりは、黒くろい、太ふとい一ひと筋すじの電でん線せんが、空くう中ちゆうにあるのを見みつけ
 ました。そして、注ちゆういふ意か深ふかく、その線せんの上うえに降おりました。すると、いままで、威いせい勢せいよく、
 きらきらと燈あかり火かがやが輝かがやいて、莊そうごん嚴げんに見みえた都と会かいが、たちまち真まつ暗くらとなつて、すべての機き
 械かいの鳴なる音おとが、止とまつてしまいました。
 雷かみなりは、どうしたことかと、びつくりしてしまいました。このとき、野の原はらの高たかい木こ立たちは、
 星ほし晴ばれのした空そらに、すがすがしく脊せ伸のびをしたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷発行

※表題は底本では、「ぴかぴかする夜《よる》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：雪森

2013年5月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

ぴかぴかする夜

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>